

元軍艦乗組員メルヴィル ——『ホワイート・ジャケット』に込められた意味——

五十嵐 博*¹

Melville, Former Man-of-War's Man —— Implications of *White-Jacket* ——

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville's fifth book, *White-Jacket* depicts the world in a man-of-war during the first half of the 19th century. It is, however, not a documentary or nonfiction per se, but rather a semi-imaginative reorganization of Melville's experiences as a man-of-war's man on his way back home from the Pacific.

To Melville, a man-of-war was something abhorrent and loathsome, filled "with the spirit of Belial and all unrighteousness," and a "fighting man [was] but a fiend." His belief and principle were "justice and humanity," from which standpoint he harshly criticized rigidly hierarchical structures and tyrannical systems in the Navy.

Melville's viewpoint is assumed by the protagonist, a main-top-man dubbed White-Jacket, who overlooks the globe in the daytime and outer space at night from the mainmast head. The white jacket he is clad in is likened to or equated with a "shroud," a "white-washed man-of-war schooner," and a "white shark," in any case being a symbol of death a man-of-war could inflict upon people, and in the connection with Melville's next book, *Moby-Dick*, it turns out to be a prototype for the monstrous white whale.

1. はじめに——帆船軍艦と時代背景

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) は、19歳の終わり頃から25歳までの5年余の間に、商船、捕鯨船、そして軍艦の順に3種類の船、いずれも帆船に乗り組んだ。

商船での経験は第4作『レッドバーン——初航海』(*Redburn: His First Voyage*, 1849)で語られ、捕鯨船での経験は第1作『タイピー——ポリネシアの生活を垣間見て』(*Typee: A Peep at Polynesian Life*, 1846)、第2作『オムー——南海の冒険談』(*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847)、第3作『マーディ——そこでの航海』(*Mardi: and A Voyage Thither*, 1849)で部分的に、そして第6作『モービィ・ディック——鯨』(*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851)で全面的に描出されている。

メルヴィルは1841年1月に捕鯨船に乗り組んで、大西洋

からホーン岬を回って太平洋へと出て、捕鯨船内とポリネシアの島々で2年余を過ごした後、ホノルルで1843年8月に米国軍艦 *United States* 号に乗り組み、ホーン岬を回る航路で1844年10月ボストンに帰着した。この軍艦内での1年余の経験に基づいて著したのが第5作『ホワイート・ジャケット——軍艦内の世界』(*White-Jacket; or The World in a Man-of-War*, 1850)である。『ホワイート・ジャケット』を出した後の彼は、米独立戦争当時の出来事を題材とした第8作『イズリアル・ポッター——異郷で50年』(*Israel Potter: His Fifty Years of Exile*, 1855)で軍艦対軍艦の熾烈な海戦シーンを描出し、そして遺作となった中編小説『水兵ビリー・バッド』(*Billy Budd, Sailor*, 1891)では18世紀末の英国軍艦を舞台として設定している。

19世紀半ばまでの欧米列強の軍艦は帆船が主体であった。メルヴィルが1年余搭乗していた軍艦は帆走フリゲートと呼ばれる3本マストの木造の海軍快速帆船で上下甲板に数十門の大砲を装備していた。メルヴィルがホノルルで

軍艦に乗り組んだのは、マシュー・ペリー (Matthew C. Perry, 1794-1858) 率いる4隻の軍艦 (外輪蒸気フリゲート艦2隻と帆走スloop型軍艦2隻) が江戸湾に侵入した1853年7月よりも10年前のことであり、彼が『ホワイト・ジャケット』を執筆したのは、このいわゆる黒船来航の4年前である。『ホワイト・ジャケット』にマシュー・ペリー艦隊は出て来ないが、第2次米英戦争で英艦隊を撃破した、彼の兄オリヴァー・ペリー (Oliver H. Perry, 1785-1819) 率いる米艦隊をメルヴィルは世界史上の艦隊の1つに挙げて、「エリー湖で英国軍を蹴散らしたペリー艦隊のブリグ、スloop、スクナー帆船群」(Perry's war-brigs, sloops, and schooners that scattered the British armament on Lake Erie - *WJ*, 1, 212)¹⁾と言及している。

2. “アラビアのロレンス” が読んだメルヴィル

“アラビアのロレンス” (Lawrence of Arabia) として知られる T. E. ロレンス (Thomas Edward Lawrence, 1888-1935) は、第1次世界大戦中のアラビアでの軍事活動を終えて英国に帰国後の1920年代初めに、メルヴィルの著作を集中的に読んだようである。彼は友人や知己に宛てた手紙の中でメルヴィルの作品に幾度か言及しており、「彼 [ハーマン・メルヴィル] はアメリカでもっと賞賛されてしかるべきだ²⁾」と書いている。また、個々の作品に言及して、「『モーヴィ・ディック』…ああ、偉大な書です。『レッドバーン』と『ピエール』をご存知ですか？あまり知られていない作品ですが、『ホワイト・ジャケット』はとてもいい。『マーディ』は退屈。初期の南海冒険物2冊 (『オムー』と『タイピー』) はまあまあでしょう³⁾」と評している。ロレンスが最高傑作と判断する作品は多くの人々と同様に『モーヴィ・ディック』だが、加えて『ホワイト・ジャケット』を「とてもいい」と、他の諸作品よりも高く評価している。なぜか？なぜ『マーディ』や『ピエール』を高く評価しなかったのか？それは、もしかしたら、ロレンスがアラビアで女っ気なしの男の戦士集団と軍事行動を共にしていたからなのかもしれない。『モーヴィ・ディック』も『ホワイト・ジャケット』も女っ気なしの男の世界である。

処女作『タイピー』から第7作『ピエール——曖昧』(Pierre; or, The Ambiguities, 1852) まで連続的に精力的に書かれた作品中の女性登場人物を概観してみると、『タイピー』では Fayaway をはじめとして現地の女性たちが多数登場した。『オムー』でもポリネシアの女性たちが多数登場し、Mrs. Bell という美しい白人女性も出てきた。『マーディ』では Yillah と Hautia という2人の女性が寓意的な中心的登場人物として出現した。『レッドバーン』では、Redburn が一目惚れしたイギリス娘をはじめ、餓死した母娘、酒場の女給、船員の妻などが登場した。とこ

ろが、『ホワイト・ジャケット』は軍艦を舞台とする男の世界で、非男性として登場して多少なりとも描写されるのは6歳の女の子だけである。しかも、その女の子が総員配置の際に従軍牧師の隣に走って行き、彼の手を掴んで彼の顔をいたずらっぽく見上げる姿が一度描かれるだけである。その他、死んだ乗組員の妻、そして「私」が帆桁の端から海に落ちる際に私の脳裏を走馬灯のように駆け巡る過去の記憶の中に母と姉妹が出てくるが、彼女たちの存在が言及されるだけで、登場人物としては出て来ない。『ホワイト・ジャケット』に続く『モーヴィ・ディック』は舞台が捕鯨船に変わるが、やはり男の世界で、女性で登場するのはニューベッドフォードの宿のおかみさんと女中、そして出港前の *Pequod* 号にさまざまな小間物を運び込む Aunt Charity と呼ばれる老婦人だけである。『モーヴィ・ディック』の後の『ピエール』では、『マーディ』に似て、2人の女性、善天使 (good angel) としての Lucy と悪天使 (bad angel) としての Isabel が中心的人物として登場する。

『ピエール』の2年半後に出された8番目の長編『イズリアル・ポッター』には、パリの可愛いメイドや、英国の農家の不親切で冷たい主婦、貴族の夫人や淑女たちなど複数の女性が登場するが、いずれも極めて軽く触れられているだけで、女性は全員端役の一部にすぎない。主人公イズリアルが18歳の時に好きになったが、その恋が実らず、家を出るきっかけとなった隣家の娘は「山のジェニー」(mountain Jenny - *IP*, xxii, 151)⁴⁾と、一応その名が明らかにされるが、彼がロンドンで結婚した女性は「ケント出身の娘で、その店 [パン屋] の店員」(a Kentish lass, the shop [=bakery]-girl - *IP*, xxv, 162) とだけ言及され、彼女の名前すら述べられていない。妻としての彼女にまつわる文言は、「全部で11人子供が彼に生まれ…次から次へと10人が埋葬された」(In all, eleven children were born to him... One after the other, ten were buried. - *ibid.*) ことと、一人だけ生き残って成長した子を「今はもう母のない子」(now motherless child - *IP*, xxv, 166) と表現して、彼女が死んだことを間接的に読者に伝えるフレーズのみで、彼女の存在感はゼロと言ってよいほどに希薄である。

メルヴィルの9番目の、そして最後の長編『信用詐欺師——彼の仮面劇』(*The Confidence-Man: His Masquerade*, 1857) では、寄付金名目でお金を騙し取られる敬虔な寡婦や帽子に喪章をつけている男の亡き悪妻 Goneril など数名の女性が登場するが、いずれも末梢的な存在で、しかも総じてあまり好意的に描かれていない。

そして遺作となった中編『水兵ビリー・バッド』では女性の登場人物はゼロである。

3. メルヴィルは軍艦をどう見ていたか？

T. E. ロレンスは『ホワイト・ジャケット』を友人に貸したことがあったが、その際、その友人に宛てた手紙に「この本『ホワイト・ジャケット』を気に入ってくれるといいのだが。アメリカ海軍の改善がこの本の意図でなければ、もっとよい本になっていただろう。だが、少なくともそれは名誉ある失敗と呼べるのものであるし、しかもその目的は達成された」⁵⁾と書いた。実際、『ホワイト・ジャケット』には、軍艦内の生活、階級制度、慣例等に対する批判、および告発と糾弾の記述が多々ある。

メルヴィルが最多のページを費やして特に糾弾しているものは鞭打ち刑である。犯罪とは言えないような規則違反を理由に4名の船員に鞭打ち刑が執行される場面では、鞭打たれる者を「奴隷」と「犬」に喩えて、「人間が奴隷のように裸にされ、犬よりも酷く鞭打たれる」(You see a human being, stripped like a slave; scourged worse than a hound. — *WJ*, xxxiii, 138) とメルヴィルは描出する。さらに彼は「海軍における鞭打ち刑は、いかなる立法者にも侵害する権利のない人間の尊厳それ自体を否定するものである」(flogging in the navy is opposed to the essential dignity of man, which no legislator has a right to violate — *WJ*, xxxv, 146) と説き、「正義と人道」(justice and humanity — *ibid.*) に反する行為として、鞭打ちの即時廃止を訴えている。

メルヴィルがどれほど鞭打ち刑なるものを嫌悪し憎悪していたかは、「私」が上官の過失の責任を取らされて鞭打ち刑に処される寸前まで追い詰められた時の「私」の心理描写中に見て取ることができる。「私」は、「私」に対する鞭打ち刑を命じた Claret 艦長を抱えて海に飛び込もうと決意し、実行に移そうとする直前、つぎのように考える。

「自然が人間に植え付けている力は、時として行使さるべきだ。そうした力が乱用されているのが実態ではあるが。自ら死に、そして他者に死を与えるという、誰もが生まれながらに持つ不可譲の特権は、何らかの目的と共に我々に賦与された。これらの行為は、辱められし耐えがたき存在にとっての最後の手段だ」(*WJ*, lxvii, 280).⁶⁾

ここでメルヴィルは、自殺と殺人が許される場合があると言っている。幸い、海兵隊伍長と、「私」が敬愛し父のようにも慕う Jack Chase が口を出してくれたおかげで、「私」に対する鞭打ち刑執行は取りやめになり「絶望と自暴自棄の只中での殺人と自殺を犯さずにすんだ私は、感謝の涙で泣き崩れそうになりながらその場に立っていた」(I, who, in the desperation of my soul, had but just escaped being a murderer and a suicide, almost burst

into tears of thanksgiving where I stood. — *WJ*, lxvii, 281) のだが、「私」White-Jacket は殺人と自殺を犯してでも自分に対する鞭打ちを忌避しようと考えた。それほどまでに鞭打ちなるものを嫌悪し憎悪していたことをメルヴィルは、この虚構の場面を通じて読者に伝達しているのである。

「私」が乗り組んでいる *Neversink* 艦内には500名の乗員がひしめき、違法な飲酒、ギャンブル、スリ、こそ泥、追い剥ぎ、強奪が発生する。さらに、艦が「大海原に浮かぶ木の壁に囲まれたゴモラ」(wooden-walled Gomorrahs of the deep — *WJ*, lxxxix, 376) と喩えられるほどのおぞましい男色の発生事例が複数あることがほめかされている。だが、軍艦内の「千の悪徳」(thousand vices — *WJ*, xix, 77) と「罪悪の総目録」(the whole catalogue of evil — *WJ*, lxxxix, 373) のトップに位置するものとしてメルヴィルが告発しているものは鞭打ちである。⁷⁾ 鞭打ちに次ぐ重大な罪悪としてメルヴィルが批判を展開している対象は、専制的で非道な軍法であり、さらに、士官らと船員たち、船員たちと海兵隊員らに対立しあうという、海軍組織体制内の「構造的悪」(organic evils — *WJ*, lxxxix, 375) である。そして、数々の社会的不公平と不正を糾弾するメルヴィルは自らの信条を「私はただ、不正が正され、すべての人に対して平等に正義が行われることを望んでいるだけだ」(I but desire to see wrong things righted, and equal justice administered to all. — *WJ*, lxxii, 304) と直截に表現している。

メルヴィルは「軍艦というものが存在する限り、それは人間の性の中の暴虐で嫌悪を催させるものの化身であり続けなければならない」(so long as a man-of-war exists, it must ever remain a picture of much that is tyrannical and repelling in human nature. — *WJ*, xlix, 208) と言い、野蛮さの具象としての軍艦が過去のものとなりこの世からなくなることを願って、つぎのように語っている。

「このつまらない物語が将来、廃れた野蛮性の歴史を記した書となるかもしれない。千年至福期が到来して軍艦がなくなった時に、軍艦なるものを人々に説明するため『ホワイト・ジャケット』が引き合いに出されることにならないとも限らない。神よ、その時の到来を急がせてまえ！おお、汝ら歲月よ！その至福の時をここに連れて来て、我らに拜ませたまえ、我らが生きている間に」(*WJ*, lxviii, 282).⁸⁾

『ホワイト・ジャケット』の英国版初版の序文でメルヴィルは「本作品の目的は軍艦内部の生活を紹介し…海軍での生活全般を描くことにある」(The object of this work is to give some idea of the interior life in a man-of-war... to paint general life in the Navy.)⁹⁾ と書き、軍艦内の階級、階層、職種、および狭い艦内での船員らの生活

ぶりをユーモアを交えながら細かに描写した。そして、物語の始まりの部分では、軍艦は、あらゆる職業の人間が乗り組んでいて砂漠に乗り上げて1つの都市を形成できるほどの「海上に浮かぶ都市」(a city afloat — *WJ*, xviii, 74) であると述べているが、物語の結末では、軍艦は船員たちの間では「海上に浮かぶ地獄」(Floating Hells — *WJ*, xc, 377) としてよく知られていることを明らかにし、軍艦に関する記述を「軍艦は…ハッチの防水用縁材のコーミングにいたるまで、悪魔ベリアル(=Belial)の精神とあらゆる不正に満ちている」(a man-of-war is... charged to the combings of her hatchways with the spirit of Belial and all unrighteousness. — *WJ*, xci, 390) という軍艦を断罪する一文で締めくくっている。

4. メルヴィルは戦いをどう見ていたか？

メルヴィルにとって軍艦は「悪魔の精神とあらゆる不正」に満ちた存在だったが、では戦闘行為を彼はどうとらえていたか？

『ホワイト・ジャケット』中には、物語と同時進行の戦闘は出てこないが、登場人物の回想談というかたちで2つの戦闘場面が描かれている。1つ目は、黒人の老船員による30年余前の英米間の最後の海戦の回想である。その黒人船員が米国人であるにもかかわらず公海上で英フリゲート艦 *Macedonian* 号に強制徴用され、米フリゲート艦であるこの *Neversink* 号と交戦した際の砲列甲板の有様をメルヴィルは「屠殺場」や「肉屋の露店」に喩え、「血と脳味噌」が飛び散り「人肉の断片」がこびりつく艦内の「血だまりの中を」豚が走り回るおぞましい光景を描出している。

「マケドニアン号内の屠殺場のような修羅場は、頭上の横梁と縦梁に血と脳味噌が飛び散っていた。ハッチ周辺は肉屋の露店のようで、人肉の断片が環付きボルトにくっついていて、豚が甲板を走り回り無傷で生き延びたが、血だまりの中を嗅ぎ回った豚の体には血がべったりとこびりついていて、船が動かなくなると、船乗りたちは、その豚を食うなんぞとんでもない人肉食いだと言って、船外に放り投げた」(*WJ*, lxxiv, 316).¹⁰⁾

2つ目は、Jack Chase が仲間たちに語り聞かせる1827年のナヴァリノの海戦での戦闘シーンである。この回想談の中でメルヴィルは Jack Chase の口を通して、砲撃を受けてショック死した少年弾薬運搬員の姿を言葉少なに描いている。

「砲撃で粉碎された舷牆から立ち上る粉塵が消えると、その子がまだじっと座っているのに気付いた。彼の両目は見開かれたままだった。“おれの可愛いヒーロー！”

とおれは叫んで彼の背中をたたいたが、彼は顔を下にしておれの足元に倒れた。心臓に手を当ててみると死んでいた。その子の体には小指一本も触れた跡がなかった」(*WJ*, lxxv, 319).¹¹⁾

メルヴィルは大量の文章を書いた作家だったが、何かをくどくどと描写することはなかった。『レッドバーン』で餓死してゆく母娘の姿を描出した時もそうだったが、悲劇的な人物にせよ情況にせよ、言葉少なく端的に表現した。

メルヴィルにとって戦争とは何で、そして戦闘行為者はどんな存在だったのだろうか？彼は戦争をフィジー諸島の人肉食いに喩えて「それ[戦争]にまつわることはすべて、愚かそのもので、キリスト教精神に反し、野蛮、残忍で、フィジー諸島と人肉食い、硝石と悪魔を連想させる」(everything connected with it [=war] is utterly foolish, unchristian, barbarous, brutal, and savoring of the Feejee Islands, cannibalism, saltpetre, and the devil. — *WJ*, lxxiv, 315) と否定し、そして戦闘行為者に関しては「戦争は、最良の人間をも神の冒瀆者に化して、フィジー並みの人間性におとしめるようだ」(it would seem that war almost makes blasphemers of the best of men, and brings them all down to the Feejee standard of humanity. — *WJ*, lxxv, 320) と、つまり、戦争によって人は人食い人種と同列の存在に堕ちると言い、最終的に「陸上の兵士であろうと水兵であろうと、戦う者は悪鬼である」(Soldier or sailor, the fighting man is but a fiend. — *WJ*, lxxv, 320) と結んでいる。

メルヴィルの作品に現れるフィジーは、南太平洋の観光地としての21世紀の今日の感覚ではなく、西欧列強による宣教と植民地化の対象地としての19世紀中葉の感覚で見なければならぬ。フィジー諸島での人肉食いについてメルヴィルは、『ホワイト・ジャケット』の次の作品『モーヴィ・ディック』¹²⁾の中で具体的に言及し、食人種と言われるフィジー人は生存のために人肉を食うことがあるのであって、残酷極まりない美食を食らう文明人よりはましだと述べている。

「食人種？誰が食人種でないのか？来たべき飢饉に備えて、痩せこけた宣教師を塩漬けにして貯蔵したフィジー人のほうがまだ我慢できよう。最後の審判の日には、鷺鳥を地面に縛り付けて肥大化させた肝臓をパテ・ド・フォワ・グラにして喜んで食べている文明開化のグルメのあなたより、将来の飢饉に備えたあのフィジー人のほうがまだ許されるだろう」(*MD*, lxxv, 433-4).¹³⁾

メルヴィルの全作品中で、物語と同時進行の海戦場面が描出されているのは、唯一『イズリアル・ポッター』であるが、主人公が搭乗する *Richard* 号と敵艦 *Serapis* 号との

間の凄絶な海戦の描出を締めくくる文にメルヴィルの戦争観が集約されている。

「リチャード号は殺戮に飽食し…硫黄のあらしの中で爆発して、ゆっくりと沈み、ゴモラのように視界から消えて行った…文明開化された人間と蛮人の違いは何か？文明は別個のものか、それとも蛮性の進化の一段階なのか？」(IP, xix, 130.)¹⁴⁾

メルヴィルは戦争を非人間的な「悪鬼」の行為として否定していた。そして、死に方についても、戦いによる華々しい死ではなく、平和のうちに死ぬことに価値を見出していた。その価値観を彼は『マーディ』¹⁵⁾の中でつぎのように語っていた。

「剣を手に、口から空威張りを発して死ぬのは、偉大なる勇気ではない。しかも甲冑に身を包んで、ワニでさえ鎖帷子のような皮に包まれて死ぬし、メカジキは決して剣を手放さないのだから、自分の寝床で穏やかな目で息を引き取るのが、将軍エパミノングスの死にまさる」(Mardi, ix, 31).¹⁶⁾

『ホワイト・ジャケット』では、18世紀末のナイルの海戦で数百名の仏人もろとも撃滅した仏戦列艦のメインマストから作られたネルソン提督の棺は果たして「栄光の棺」(a glorious coffin — WJ, lxxiv, 316) か、と疑問を呈し、「私」は生きた「緑の木の幹の中に」眠りたいと書いている。

「朽ちていくマストの中に眠るネルソン提督に平安あれ！だが、私は緑の木の幹の中に納められたい。そして死後も生命の樹液を私の周りに巡らせ、私の軀を、私の平和な墓の日よけとなる葉たちに惜しみなく与えたい」(WJ, lxxiv, 316).¹⁷⁾

5. 檣楼員の視点

『ホワイト・ジャケット』を脱稿し、その校正刷りを抱えて出版交渉のためにロンドンへ向かったメルヴィルは、個室船室乗客として乗船しながらも時々マストに昇っていたことを日記に書き残すほど、船上の高いところが好きだったようである。¹⁸⁾『ホワイト・ジャケット』で「私」White-Jacket は大檣楼員として設定されており、

「私は大檣楼員で、しかも私の持ち場はフリゲート艦の一番高い帆桁、メイン・ロイヤル・ヤードだったので、今こうして私は自由奔放に思いつくままに、また一切の偏りなく軍艦世界を俯瞰する話をするのできるのだ」(WJ, xii, 47)¹⁹⁾

と述べている。そして、檣楼員たちの置かれている環境と彼らが目にする風景が彼らの気質を形成するとメルヴィルは語っている。

「前檣、大檣、後檣の檣楼員たち以上に自由で気高い心をもち、陽気で明るく屈託のない、冒険好きで、はしゃぐことが好きな連中がいたのだろうか？彼らの心が自由闊達だったのは、毎日、職務でマスト周辺の索具上を自由に歩き回っていたからであり、気高い心をもっていたのは、下の甲板上の小さな騒ぎや愚痴やけちくさいことの頭上高くに彼らがいたからである…こうした檣楼員たちの陽気さの原因は、彼らが青く果てしない海、えくぼのようなさざ波を立てて笑う、陽光あふれる海をいつも見渡していたことであつた」(WJ, xii, 47).²⁰⁾

メルヴィルは『オムー』では「国ということに関しては、船乗りは特にどの国民にも属していない」(As for our country, sailors belong to no nation in particular. — *Omo*, lxxxii, 313)²¹⁾と言ひ、続いて『マーディ』では「全マーディを自分の家と考えよ。国家は名称にすぎない。そして大陸は移ろいゆく砂でしかない」(Take all Mardi for thy home. Nations are but names; and continents but shifting sands. — *Mardi*, clxxxix, 638) と語り、世界規模、地球規模の視野から人間世界を見ていたが、『ホワイト・ジャケット』ではその視界をさらに宇宙規模に拡大している。

「私」White-Jacket は夜、一人でマスト上部に昇り、星々を見つめて全宇宙との一体感を味わいながら「我々船乗りの航海は無意味ではない。我々は生国を離れて宇宙に帰化するのだ」(we sailors sail not in vain. We expatriate ourselves to nationalize with the universe. — WJ, xix, 76) と言う。続けて、メルヴィルは、キリスト教徒たちが戦鬪で奪い取った相手国の軍艦を「水に浮かぶ戦勝記念碑」(floating trophies — WJ, lxiv, 266) として航行させる行為は、野蛮なインディアンが殺した相手の手を戦勝記念として毛布に赤く描いて人々に誇示する行為と同じであり、したがって、宇宙の中の地球はまだ未開の地であり、「まだ一人の宣教師もこの哀れな未開の惑星を訪れていない。文明を文明化し、キリスト教界をキリスト教化するために」(not a missionary has yet visited this poor pagan planet of ours, to civilize civilization and christianize Christendom — WJ, lxiv, 267) と述べる。そして最終章に続く“*The End*”では、地球を銀河艦隊の中の一隻の軍艦に喩え、神を船大工と提督に見立てて、壮大な宇宙の視点からこう語る。

「海洋を航行する軍艦のように、この地球は大気中を進む。我々人間は皆、この快速航行する不沈の世界フリゲート艦に乗っている。この艦を造った船大工は神。地

球船は天の川艦隊の中の一隻にすぎず、艦隊の提督は神」(WJ, “The End,” 398).²²⁾

また、「私」White-Jacketも宇宙の一部としてとらえられており、マストヘッド上の「私」がまとう白ジャケットは、夜は「天の川の一部のように」(like a bit of the Milky Way — WJ, xix, 78) 輝くという比喩表現をメルヴィルは使用している。

6. 白ジャケットは何の表象か？

メルヴィルは、なぜこの作品に『ホワイット・ジャケット』(White-Jacket)というタイトルをつけたのか？ 作品中で衣服そのものを指す場合には彼はwhite jacketと書いている。頭字を大文字にし、しかもハイフンで結んだWhite-Jacketという表記は、「私」のニックネームとして使用されている。つまりWhite-Jacketは、white jacketを着た「私」という意味で使われている。

『タイピー』での「私」は現地人からTommoと呼ばれ、『オムー』では「私」のまま別称はなく、『マーディ』での「私」は半神Tajiを詐称し、『レッドバーン』での「私」にはWellingborough Redburnという虚構の姓名が与えられていた。そして『ホワイット・ジャケット』での「私」は終始、White-Jacketというあだ名で呼ばれている。

White-Jacketという作品名が指し示すものは、white jacketなる衣服ではなく、white jacketを身にまとった「私」である。ホーン岬の風雨をしのぐために「私」がこしらえたwhite jacketは物語の冒頭に登場し、結末で、そのwhite jacketは切り裂かれ、銚を打ち込まれて海底に消え、そして救出された「私」はまもなく故国に帰還する。つまり、White-Jacketは軍艦に乗り組んでいた時の「私」、軍艦乗組員としての「私」を意味しているのである。だから、語り手としての「私」は、軍艦乗組員当時の「私」White-Jacketを時として客体視して、「彼」とか「お前」White-Jacketと呼びかけているのである。

全93章の『ホワイット・ジャケット』には山場が9つほどある。第1の山場はホーン岬を回る場面で、強風吹きすさぶ厳寒のホーン岬を回る帆船軍艦は凍てつきながら大嵐の中を通り抜けて大西洋に出る。第2の山場は4名の乗組員に対する鞭打ちの刑執行で、これが描出量的にも最大の山場となっている。第3は、大腿部を撃たれた乗組員が片脚切断手術により死亡する出来事。第4は、「私」White-Jacket自身が鞭打ち刑を受けそうになり、殺人と自殺を考える場面。第5は、軍法の法制面での不正を正すことを訴える章。第6は、登場人物たちが語る過去の海戦シーン。第7は、Shenlyという前檣楼員の死と遺体の水葬。第8は、ひげを刈り込めという艦長命令に最後まで従わなかった老船乗りに対する鞭打ち刑執行。そして最終の山場

は、白ジャケットのせいでは海に落ちた「私」が、そのジャケットを切り裂いて脱出し、ホホジロザメと見紛われた白ジャケットが銚を何本も打ち込まれて海中に没する場面である。

物語が進行する過程で、白ジャケットは、被服として、また「私」の呼称として、間欠的に登場する。『マーディ』では、Yillahを探求するTaji一行の前にHautiaの使者たちが、やはり間欠的に現れるが、使者たちはYillah探求の一定段階が終了する都度、姿を現しており、彼女たちの出現には物語進行上の因果関係があった。しかし『ホワイット・ジャケット』における衣服white jacketと「私」White-Jacketに関する記述と描出は、どちらかと言うと散発的で、そこには物語の前後関係上の必然は感じられない。これは、『ホワイット・ジャケット』が『レッドバーン』脱稿直後の1849年夏のわずか2ヶ月半ほどの短期間で書き上げられたことに、その一因があるのかもしれない。

いずれにせよ、white jacketまたはWhite-Jacketの描出は、『モーヴィ・ディック』での白鯨の描出の前座のようなものになっている。では、なぜ白なのか？

6.1 メルヴィルの屍衣として

作品冒頭で「私」は、このジャケットを自分でこしらえた経緯を語り、出来上がった白いズック製のジャケットを「屍衣のように白い」(white as a shroud — WJ, i, 3)と表現している。そして「後に危うく私の屍衣になりかけた」(my shroud it afterward came very near proving — *ibid.*)と述べている。

この白ジャケットは2度、「私の屍衣」になりかける。1度目は、南太平洋上で桶屋が海に落ちて死んだ日の夜のこと、白ジャケットに包まってマスト天辺近くの帆桁の上にいる「私」は桶屋の亡霊に間違えられ、夜直の乗組員たちによって30メートル下の甲板上に危うく落とされそうになる。

ペルー沖からホーン岬を回って、リオ・デ・ジャネイロ経由でヴァージニア沖に至るNeversink号の航海中、白ジャケットは「私」に「ことごとくの災難と不自由、苦勞と苦難」(the mishaps and inconveniences, troubles and tribulations of all sorts — WJ, xcii, 391)をもたらす。「私」の白ジャケットは、暗色のジャケットを着ている乗組員たちの中で目立ったので、上官たちから用を言いつけられやすかったし、また、ロープを全員で引っ張る際にはいつも、他の乗組員たちへのお手本となるような働きを示さねばならなかった。だから「私」は「おお！ どれほど私はわが不運な衣服を呪ったことか。どれだけ私はそいつを甲板にこすりつけて黄褐色に変えようとしたことか」(Oh! how I execrated my luckless garment; how often I scoured the deck with it to give it a tawny hue — WJ, xxix, 121)と嘆く。船上でのオークションで白ジャケットを売り払おうとしたが買い手がつかず、42ポンド砲弾と

一緒に海底に沈めてしまおうかとも思った。しかし「もしジャケットを沈めれば、海の底で広がってベッドのようになり、その上に私が、早晚、死人となって横たわることになる」(If I sink my jacket..., it will be sure to spread itself into a bed at the bottom of the sea, upon which I shall sooner or later recline, a dead man. —*WJ*, xlvii, 203) という迷信的な考えから実行しなかった。

迷信深い乗組員は、不吉な数字となる13人目のメンバーとしてやって来た「私」White-Jacketが数々の災いの元になっていると言う。白ジャケットのせいで「私」は、12名1組の本来の食事グループを去ることになり、新しい食事グループに13人目のメンバーとして加わったが、それ以降、新しい食事グループの中の3人が不幸な目に遭う。帆桁から墜落して不具になった者、歩哨に脚を撃たれた後で右脚切断手術を実施されて死亡した者、そして肺を患って死に向かう者。「これは食事グループの中に13という数があるからだ…くそつたれ、ヨナめ！…おまえとそのジャケットのせいだ」(This comes of having *thirteen* in the mess... Damn you, you Jonah!.. Blast you, and your jacket, say I. —*WJ*, lxxviii, 332-3) と迷信深い乗組員は言い、「私」はそうした迷信を否定しつつも、「私」自身、やはり「私」の白ジャケットを呪う。

白ジャケットが「再び、そして最後に屍衣になりかけた」(for the second and last time, came near proving his shroud —*WJ*, xcii, 391) のは、物語の結末で艦がヴァージニア沖に差し掛かった時である。その時、30メートル以上の高さのメインマスト上で帆の滑車に索を通す作業をしていた「私」は、船の急な動きによって「私」の頭にかぶさったジャケットのすそを帆の一部と勘違いして引っ張り、帆桁の先端部分から真っ逆さまに海に向かって落ちる。父、母、姉妹の姿が走馬灯のように脳裏を駆け巡り、過去のすべてを凝集的に感じ取りながら、空中の大渦巻の中を通過して海中に突っ込む。海中で生と死の音を耳にした後で海面へと浮上するが、水中で膨らんだ白ジャケットのせいで身動きがとれず、ベルトに挟んでおいたナイフで「自分自身を切り開くかのように」(as if I were ripping open myself —*WJ*, xcii, 394) してジャケットを切り裂き、「私はジャケットから脱け出て自由になった」(I then burst out of it, and was free. —*ibid.*) のである。そして、沈み始める白ジャケットを目の前にして「私」は「沈め、沈め、屍衣よ！…永久に沈め！汝、呪われしジャケットよ！」(Sink! sink! oh shroud! ... sink forever! accursed jacket that thou art! —*ibid.*) と思う。艦上の乗組員たちは白ジャケットをホホジロザメ (white shark —*ibid.*) と思い、白ジャケットは銚を何本も打ち込まれて沈む。

『モービィ・ディック』の42章「白い鯨」(The Whiteness of the Whale) で白色がもつ多重的な意味を追究するメルヴィルは、極度の恐怖と嫌悪感を呼び起こす存在としてシロクマとホホジロザメを挙げて、「白い屍衣を着たクマやサ

メ」(the white-shrouded bear or shark —*MD*, xlii, 274) と表現している。つまりメルヴィルは、白い色には死を連想させ、死に対する恐怖を呼び覚ます一面があると考えたのである。「白い鯨」の章の最終パラグラフでメルヴィルは、広大な雪原の中に「無色にして全色の無神論」(a colorless, all-color of atheism —*MD*, xlii, 282) を見、雪原を「白い屍衣」(white shroud —*MD*, xlii, 283) に喩える。

遺作となった『水兵ビリー・バッド』での前橋楼員ビリーもやはり白い服装で、「白いジャンパーと白いズック製ズボン」(white jumper and white duck trousers —*BB*, xxiv, 118)²³⁾ を身につけており、『ホワイト・ジャケット』での白ジャケットと同様に「屍衣」に喩えられている。暁の絞首刑執行を待つビリーを「事実上、すでに彼は屍衣を、もしくは屍衣に代わる衣服を身にまとっていた」(In effect he is already in his shroud, or the garments that shall serve him in lieu of one. —*BB*, xxiv, 119) とメルヴィルは描写する。

メルヴィルは一貫して、白を「屍衣」の色としても、つまり死の表象としても見ていたが、そのことを最初に明示し、前面に打ち出した作品が『ホワイト・ジャケット』である。²⁴⁾ 軍艦乗組員の「私」は「屍衣」をまとっていたのであり、「私」の白ジャケットは死の表象であった。乗組員たちは「私」を「冥土のホワイト・ジャケット」(infernal White-Jacket —*WJ*, xix, 78) と呼び、「私」の白ジャケットを「冥土のジャケット」(infernal jacket —*WJ*, xxix, 121) と呼んだ。

死の表象を脱ぎ捨てることは、死からの解放であり、生への復帰である。だからメルヴィルは「白ジャケットは海の底に沈んだ」(the white jacket has sunk to the bottom of the sea —*WJ*, xciii, 395) と語った直後、航海が終わりに近づく艦上から夜の天空を見上げて、「やせ細った下弦の月が航海の終わりを暗示している。だが、星々が顔を出して永遠の輝きを見せている。あれが未来だ、永遠の彼方の光あふれる永劫の来世だ」(The meagre moon is in her last quarter—that betokens the end of a cruise that is passing. But the stars look forth in their everlasting brightness—and *that* is the everlasting, glorious Future, forever beyond us. —*WJ*, xciii, 396) と、未来と来世への見果てぬ希望に思いを馳せながら、故郷の地に帰る喜びを表現し、作品最後を「誰に苦しめられようと、何に包囲されていようと、人生は故郷への航海である」(Whoever afflict us, whatever surround, Life is a voyage that's homeward-bound! —*WJ*, "The End," 400) と締めくくっているのである。

6.2 メルヴィルの霊として

作品冒頭で艦がペルーを出港する際、白ジャケットを身にまとった「私」はメインマスト天辺でロイヤル帆を広げ

る作業をしており、ロイヤル帆がアホウドリの翼に、そして「私」自身はアホウドリそのものに喩えられている。

「メインマスト最上部のロイヤル帆を広げていたのがホワイト・ジャケットだった。はるかな高みにあるロイヤル帆は、白いアホウドリの翼のように見え、目のくらむような桁端の上を飛び回るホワイト・ジャケットはアホウドリそのものに思えた！」(WJ, ii, 7)²⁵⁾

『モーヴィ・ディック』の「白い鯨」の章でメルヴィルはアホウドリを「白い亡霊」(white phantom—MD, xlii, 274-5)と呼んでいるが、彼は「私」White-Jacketを、軍艦乗組員だった過去の「私」の「亡霊、幻影」(phantom)としてとらえて描出したのではなかろうか。

また、Shenlyの遺体を水葬に付す儀式が上甲板で執り行われている間中、メインマスト上を舞っていた「一羽の雪白の鳥」(a snow-white, solitary fowl—WJ, lxxxii, 342)は「シェンリーの霊」(the spirit of Shenly—*ibid.*)であると、Jack Chaseの口を通してメルヴィルは言っている。だとすれば、メインマスト最上部が持ち場である「私」White-Jacketは、軍艦乗組員だった当時のメルヴィル自身の「亡霊、幻影」または「霊」として設定されているのではないだろうか。

鞭打ち刑の廃止を訴えるメルヴィルは「私、ホワイト・ジャケットは、不変の信条たる崇高なマストヘッドから降りて来て、あなた方、提督や艦長らと闘う用意がある」(White-Jacket is ready to come down from the lofty mast-head of an eternal principle, and fight you—Commodores and Captains of the navy.—WJ, xxxvi, 147)と言う。メルヴィルの「不変の信条」とは「正義と人道」(justice and humanity—WJ, xxxv, 146)を指しており、「崇高なマストヘッド」はその表象であり、そのマストヘッド上にいる彼の「霊」White-Jacketはその信条の代弁者だということである。

6.3 虚偽の色として

「私」がオークションで白ジャケットを売り払おうとした際、乗組員の誰一人として値をつけようとせず、それどころか白ジャケットに対する嫌悪感をあらわにした。船倉部門キャプテンは「ジャケットだと！…白塗りのスクーナー軍艦とでも呼んだらどうだ？」(*Jacket* do you call it!.. Why not call it a white-washed man-of-war schooner?—WJ, xlvi, 202)と声を張り上げ、白ジャケットを「白塗りの軍艦」に喩えた。²⁶⁾日本で後に黒船と呼ばれるようになったように、当時は帆船軍艦も蒸気軍艦も船体はタールを塗られて黒かったが、白ジャケットは平乗組員たちにとって、戦時には自分たちに死をもたらす黒塗りの軍艦の外表面を「白く塗って」美化しただけのような存在であり、白ジャケットも軍艦もともに嫌悪の対象だというわけであ

る。

「白く塗って」美化されたものは真実の姿を見せていない。“The End”で、軍艦内の世界を地球上の人間世界の縮図としてとらえるメルヴィルは、人類が乗る船は軍艦と同様に目に見える外面だけがきれいにされた「嘘」だと言う。

「外面的に見れば我々の船は嘘である。外から見えるのは、きれいに掃除された甲板のみで、喫水線上の船板はちよくちよく塗り直される。ところが、秘密の貯蔵室を抱えた船体の大部分は水面下深くを進行している」(WJ, “The End,” 399).²⁷⁾

続けて、メルヴィルは地球という同じ船に乗る世界の人々に呼びかけて、きれいにされた目に見える上甲板の下の目に見えない砲列甲板は不条理な苦しみで満ちていると訴える。「乗組員諸君、世界の仲間たちよ！我々民衆は数々の虐待に苦しんでいる。砲列甲板は不平不満で満ちている」(Oh, shipmates and world-mates, all round! we the people suffer many abuses. Our gun-deck is full of complaints.—WJ, “The End,” 399)と。この「乗組員諸君」という呼びかけ方は『モーヴィ・ディック』のMapple神父に引き継がれる。Mapple神父も、捕鯨者礼拝堂内のまばらな会衆に向かって「乗組員諸君」と呼びかけ、「世界は船出した一隻の船のようなもので、その航海はまだ終わっていない」(the world's a ship on its passage out, and not a voyage complete—MD, viii, 57)と世界を一隻の船に喩えながら説教をし、最後に「虚偽の面おもてに向かって真実を説くこと」(To preach the Truth to the face of Falsehood!—MD, ix, 68)の必要性を訴える。そして、メルヴィルの代弁者の一人として物語の初めに一度だけ登場したMapple神父は、Ahab船長に姿を変えて再び登場し白鯨を追求する、という人物設定をメルヴィルは行つたと筆者は解釈する。Ahabが打ち抜けと言う「仮面」(mask—MD, xxxvi, 236)はMapple神父のいう「虚偽の面おもて」であり、それは白鯨の外表面の白色を指している。

白ジャケットを「白塗りの軍艦」と呼ぶメタフォーの奥には、「白塗りの」美化された人間世界という意味が内包されており、『ホワイト・ジャケット』から『モーヴィ・ディック』へとつながる白の表象の進化を読む時、白ジャケットは明らかに白鯨のプロトタイプとして位置づけられ解釈されることができる。²⁸⁾

7. おわりに

メルヴィルは1849年の春から夏にかけてのわずか4～5ヶ月の間にマンハッタンの住居で『レッドバーン』と『ホワイト・ジャケット』を立て続けに書き上げた後、岳父Lemuel Shawに宛てた手紙(1849年10月6日付)の中で

「これらは、金のためにやった2つの賃仕事です。他の人たちが仕事で木を挽くように、必要に迫られてやった仕事です。そして、自分を書きたいと思っている類いの本を書くことは控えなければならないと感じつつも、それでも、これら2冊を執筆するにあたり、自分をそれほど抑制せず…ほぼ感じるままに語りました²⁹⁾と書いた。そして、翌年春に Richard Henry Dana, Jr. に宛てた手紙 (1850年5月1日付) に「木を挽くような仕事をして手にする『金銭的利益』のためだけにこうした本を書いたわけではない³⁰⁾と書いているように、メルヴィルは生活のための「金銭的利益」を得るためだけに書いたわけではなく、同時に、自分の心情を偽らずに、言いたいことを書き表した。

Southern Literary Messenger 誌は、立て続けに出版されたこれら2作品の書評 (1850年4月) で『レッドバーン』と『ホワイト・ジャケット』は、はっきりした目的をもって書かれている。『レッドバーン』は商船業務規則の改革を企図し、『ホワイト・ジャケット』は“海軍における鞭打ち”の問題に目を向けている³¹⁾と、メルヴィルが当時の社会に訴えたかったことの一部を指摘したが、メルヴィルは「正義と人道」を信条とする自らの視座から、さまざまな直喩、隠喩と表象を通して、あるいは直截な言葉で、数々の社会的不公平と不正を批判し、告発し、糾弾したのである。

註

- 1) Herman Melville, *White-Jacket; or The World in a Man-of-War* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970). 引用には、省略されたタイトル、章、頁を付す。
- 2) “He [= Herman Melville] is not enough praised by Americans.” (David Garnett ed., *The Letters of T. E. Lawrence* [London: Jonathan Cape, 1938], p. 797.) [] 内の語句は筆者が補った。以下同様。
- 3) “*Moby Dick*... ah, there’s a titan of a book. Do you know *Redburn*, & *Pierre*, two of the less common ones? *Whitejacket* [sic] very good: *Mardi* dull: two early S. Sea adventures (*Omoo* & *Typee*), fair.” (*Ibid.*, p. 458.)
- 4) Herman Melville, *Israel Potter: His Fifty Years of Exile* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1997). 引用には、省略されたタイトル、章、頁を付す。
- 5) “I hope you will like it [= *White-Jacket*]: had it not been meant to improve the American Navy it would have been a better book: but at least that is an honourable fault, & the particular aim was achieved.” (David Garnett ed., *op. cit.*, p. 402.)
- 6) “Nature has not implanted any power in man that was not meant to be exercised at times, though too often

our powers have been abused. The privilege, inborn and inalienable, that every man has of dying himself, and inflicting death upon another, was not given to us without a purpose. These are the last resources of an insulted and unendurable existence.” (*WJ*, lxvii, 280.)

- 7) メルヴィルは、米軍艦 *United States* に搭乗していた13ヶ月余の間に、計163名の乗員が鞭打ち刑に処されるのを目撃していたようである (See Newton Arvin, *Herman Melville* [New York: The Viking Press, 1950], p. 74; Leon Howard, *Herman Melville: A Biography*. [Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967], p. 72).
- 8) “Who knows that this humble narrative may not hereafter prove the history of an obsolete barbarism? Who knows that, when men-of-war shall be no more, ‘White-Jacket’ may not be quoted to show to the people in the Millennium what a man-of-war was? God hasten the time! Lo! ye years, escort it hither, and bless our eyes ere we die.” (*WJ*, lxviii, 282.)
- 9) Herman Melville, *White Jacket; or The World in a Man-of-War* (New York: Grove Press, Inc., 1956), “Preface to the First English Edition.”
- 10) “The beams and carlines overhead in the Macedonian slaughter-house were spattered with blood and brains. About the hatchways it looked like a butcher’s stall; bits of human flesh sticking in the ring-bolts. A pig that ran about the decks escaped unharmed, but his hide was so clotted with blood, from rooting among the pools of gore, that when the ship struck the sailors hove the animal overboard, swearing that it would be rank cannibalism to eat him.” (*WJ*, lxxiv, 316.)
- 11) “... after the dust of the powdered bulwarks had blown away, I noticed he yet sat still, his eyes wide open. ‘*My little hero!*’ cried I, and I clapped him on the back; but he fell on his face at my feet. I touched his heart, and found he was dead. There was not a little finger mark on him.” (*WJ*, lxxv, 319.)
- 12) Herman Melville, *Moby-Dick; or, The Whale* (New York: The Modern Library, 1944). 引用には、省略されたタイトル、章、頁を付す。
- 13) “Cannibals? who is not a cannibal? I tell you it will be more tolerable for the Fejee that salted down a lean missionary in his cellar against a coming famine; it will be more tolerable for that provident Fejee, I say, in the day of judgment, than for thee, civilized and enlightened gourmand, who nailest geese to the ground and feasted on their bloated livers in thy paté-de-foie-gras.” (*MD*, lxxv, 433-4.)
- 14) “the Richard, gorged with slaughter,.. blasted by tornadoes of sulphur, slowly sunk, like Gomorrah, out of sight... What separates the enlightened man from the savage? Is civilization a thing distinct, or is it an advanced stage of barbarism?” (*IP*, xix, 130.)
- 15) Herman Melville, *Mardi: and A Voyage Thither* (Evanston

- and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1970). 引用には、タイトル、章、頁を付す。
- 16) “‘Tis no great valor to perish sword in hand, and bravado on lip; cased all in panoply complete. For even the alligator dies in his mail, and the swordfish never surrenders. To expire, mild-eyed, in one’s bed, transcends the death of Epaminondas.” (*Mardi*, ix, 31.)
- 17) “Peace to Lord Nelson where he sleeps in his moldering mast! but rather would I be urned in the trunk of some green tree, and even in death have the vital sap circulating round me, giving of my dead body to the living foliage that shaded my peaceful tomb.” (*WJ*, lxxiv, 316.)
- 18) Herman Melville, *Journals* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1989), pp. 7-8.
- 19) “it is to the fact of my having been a main-top-man; and especially my particular post being on the loftiest yard of the frigate, the main-royal-yard; that I am now enabled to give such a free, broad, off-hand, bird’s-eye, and, more than all, impartial account of our man-of-war world.” (*WJ*, xii, 47.)
- 20) “Who were more liberal-hearted, lofty-minded, gayer, more jocund, elastic, adventurous, given to fun and frolic, than the top-men of the fore, main, and mizzen masts? The reason of their liberal-heartedness was, that they were daily called upon to expatiate themselves all over the rigging. The reason of their lofty-mindedness was, that they were high lifted above the petty tumults, carping cares, and paltrinesses of the decks below...The reason of the mirthfulness of these top-men was, that they always looked out upon the blue, boundless, dimpled, laughing, sunny sea.” (*WJ*, xii, 47.)
- 21) Herman Melville, *Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry library, 1968). 引用には、タイトル、章、頁を付す。
- 22) “As a man-of-war that sails through the sea, so this earth that sails through the air. We mortals are all on board a fast-sailing, never-sinking world-frigate, of which God was the shipwright; and she is but one craft in a Milky-Way fleet, of which God is the Lord High Admiral.” (*WJ*, “The End,” 398.)
- 23) Herman Melville, *Billy Bud, Sailor* (An Inside Narrative) (Chicago: The University of Chicago Press, 1962). 引用には、省略されたタイトル、章、頁を付す。
- 24) 白と死の連想は、前面に打ち出されたテーマとはなっていないが既に『マーディ』の中で示唆されていた。3人の復讐者たちが Taji に対して叫ぶ呪詛の文言、「おお、人殺しめ！ 白い呪いをお前に！ お前の魂が我らの憎しみにより白化するように！」(Oh murderer! white curses upon thee! Bleached be thy soul with our hate! — *Mardi*, c, 306-7)の中でメルヴィルは、サンゴの白化と死を、魂の死の隠喩として使っている。
- 25) “It was White-Jacket that loosed that main-royal, so far up aloft there, it looks like a white albatross’ wing. It was White-Jacket that was taken for an albatross himself, as he flew out on the giddy yard-arm!” (*WJ*, ii, 7.)
- 26) Adler は白ジャケットを軍艦の象徴としてとらえて、彼女の解釈を詳述しているが、それは一面の真実である (Joyce Sparer Adler, *War in Melville’s Imagination* [New York and London: New York university Press, 1981], pp. 29-54). しかし、白鯨ほどではないにしても、白ジャケットにも多重な意味が込められており、その中核的意味をなすのは、白ジャケット、イコール軍艦の象徴ではなくて、白ジャケット、イコール軍艦乗組員としての「私」の表象である。
- 27) “Outwardly regarded, our craft is a lie; for all that is outwardly seen of it is the clean-swept deck, and oft-painted planks comprised above the waterline; whereas, the vast mass of our fabric, with all its store-rooms of secrets, forever slides along far under the surface.” (*WJ*, “The End,” 399.)
- 28) 白ジャケットの象徴的意味についてメルヴィル研究者たちは様々な推量を述べている。以下にその数例を記しておく。
- Nathalia Wright は「メルヴィルの語った白いものもつ意味が作品によって変化したり、また、一冊の作品の中で時として不明確になりすぎて一貫した象徴的価値をもちえないとしても、それら白いものすべてには無限性が暗示されている。ブロンドのイラーは測り知れないし、白鯨は捕らええないし、白ジャケットのポケットや割れ目やだぶついたひだは無尽蔵である」(If the meaning of the white objects he [=Melville] mentioned varies from book to book, and within a single book sometimes becomes too uncertain to have consistent symbolic value, there is about them all a suggestion of the infinite. The blond Yillah is inscrutable; the white whale is uncapturable; the pockets, crevices, and voluminous folds of the white jacket are inexhaustible... —Nathalia Wright, *Melville’s Use of the Bible* [Durham, N.C.: Duke University Press, 1949], p. 31) と述べている。Charles Feidelson Jr. も同意見で、白ジャケットは「イラーやあの鯨がもつ無限の可能性によく似た何か」(something very like the infinite potentialities of Yillah and the whale —Charles Feidelson, Jr. *Symbolism and American Literature* [Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953], p. 181) を表していると述べているが、二人とも、では具体的に何の象徴か、をピンポイントで追究してはいない。
- Richard Chase は、白ジャケットは「青年 [メルヴィル] の父の神秘性」(the mystery of the young man’s [= Melville’s] paternity —Richard Chase, *Herman Melville: A Critical Study* [New York: The Macmillan

Company, 1949], p. 25)の象徴で、その白い色は「亡き父の道徳的汚れのなさ」(the moral immaculateness of his dead father —*ibid.*)を表し、マストの桁端からの主人公の落下を「イノセンスからの墜落」(fall from innocence —*ibid.*, p. 26)と解釈している。Chaseはそのことを述べていないが、白ジャケットの象徴的意味に関する彼の推量は、『ホワイト・ジャケット』を『レッドバーン』および『ピエール』という他の作品と合わせて総合的に解釈した結果、出てきたものであろうと筆者は推察する。『ホワイト・ジャケット』という作品の枠内ではChaseの推量は全く説得力をもたないからである。

Lawrance Thompsonは、『ホワイト・ジャケット』の作品構成の中に、反キリスト教的(anti-Christian)な寓喩、および「キリスト教の教義と神学に対する諷刺」(the satire aimed at Christian dogma and Christian theology —Lawrance Thompson, *Melville's Quarrel with God* [Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952], p. 105)を読み取りながら論じており、「ジャケットを切り払う行為を、宗教的信念を切り払う象徴的行為として」(the slashing off of the jacket as an action symbolic of slashing off religious beliefs —*ibid.*, p. 102)とらえている。Thompsonの論考には大きくうなずけるところがある。

Edgar A. Drydenは、白ジャケットを「[軍艦の世界の] 現実を映し出す鏡…真実の象徴」(a mirror of reality for [the man-of-war world]... a symbol of truth —Edgar A. Dryden, *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth* [Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968], p. 77)と解釈している。

Warner Berthoffは、白ジャケットを「断片的でしかない象徴」(a merely piecemeal symbolism —Warner Berthoff, *The Example of Melville* [New York: The Norton Library, 1962], pp. 34-5)とみなし、『ホワイト・ジャケット』は『モーヴィ・ディック』のための「テスト版のようなもの」(something of a trial run)だと評している。

- 29) “They are two *jobs*, which I have done for money—being forced to it, as other men are to sawing wood. And while I have felt obliged to refrain from writing the kind of book I would wish to; yet, in writing these two books, I have not repressed myself much... but have spoken pretty much as I feel.” (Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* [New Haven: Yale University Press, 1960], pp. 91-2.)
- 30) “did I not write these books of mine almost entirely for ‘lucre’—by the job, as a woodsawyer saws wood” (*Ibid.*, p. 106.)
- 31) “‘Redburn’ and ‘White Jacket’... are written with a definite purpose in view. ‘Redburn’ aimed at a reform in the discipline of the merchant service; ‘White Jacket’ directs attention to the subject of ‘flogging in the navy.’” (Jay Leyda ed., *The Melville Log* [New

York: Gordian Press, 1969], p. 373.)

参考文献

- Adler, Joyce Sparer. *War in Melville's Imagination*. New York and London: New York University Press, 1981.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Auden, W. H. *The Enchafed Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
- Benfey, Christopher. *The Great Wave*. New York: Random House, 2003.
- Berthoff, Warner. *The Example of Melville*. New York: The Norton Library, 1962.
- Bowen, Merlin. *The Long Encounter: Self and Experience in the Writings of Herman Melville*. Chicago: The University of Chicago Press, 1960.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *Herman Melville: A Critical Study*. New York: The Macmillan Company, 1949.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters of Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- Garnett, David, ed. *The Letters of T. E. Lawrence*. London: Jonathan Cape, 1938.
- 林信行『メルヴィル研究』東京：南雲堂，1958。
- Howard, Leon. *Herman Melville: A Biography*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1967.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy, and Tradition in the Nineteenth Century*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1955.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Maugham, W. Somerset. *Ten Novels and Their Authors*. London: Vintage, 2001.

- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京：研究社，1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京：北星堂書店，1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.
- Wright, Nathalia. *Melville's Use of the Bible*. Durham, N. C.: Duke University Press, 1949.

要 旨

メルヴィルの第5作『ホワイト・ジャケット』は19世紀前半の軍艦内の世界を描出している。いわゆるドキュメンタリーやノンフィクションではなく、彼が太平洋から軍艦乗組員となって帰郷した際の経験を想像を交えながら再構成した作品である。

メルヴィルにとって軍艦は「悪魔の精神とあらゆる不正」に満ちた、嫌悪と忌避の対象であり、「戦闘を行う者は悪鬼そのもの」であった。「正義と人道」が彼の信条であり、その視座から彼は、海軍の硬直した階級構造や強圧的制度を激しく批判した。

メルヴィルの視点で物事を見る主人公は White-Jacket というニックネームで呼ばれる大橋楼員で、昼は地球を夜は宇宙を大橋頭から眺めている。彼が着ている白ジャケットは「屍衣」、「白塗りの軍艦」、そして「ホホジロザメ」に喩えられ、いずれの場合も、軍艦が人々にもたらす死の表象になっている。そして、この白ジャケットはメルヴィルの次の作品『モービー・ディック』に出現する巨大な白鯨のプロトタイプとなる。